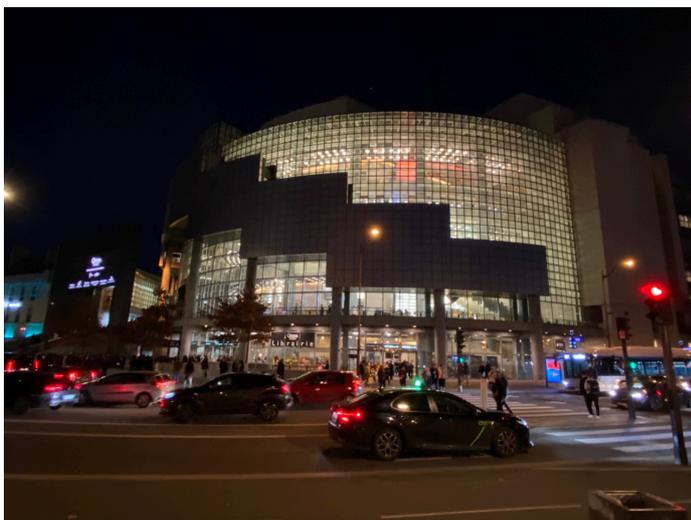


# パリ通信・第170号

## オペラ『カルメン』(ジョルジュ・ビゼー)

3日「節分」を過ぎて春が待ち遠しい候、フランスでは2日「聖燭祭(Chandeleur)」で「クレープ」をいただく日だ。キリスト生誕から40日後、マリアとヨセフがイエス・キリストを連れて神殿奉獻を行ない、陽が落ちて蝋燭を灯して参拝が続いたことに由来する行事である。なぜクレープかと言えば、「聖燭祭」は光の到来を祝うことを意味し、太陽の形をした丸い黄金色のクレープがそれを象徴する。

この時期になると寒さの中にも時折り春の日差しが照ることがあり、パリの花屋には早くも南仏からの黄色いミモザが届いている。外出も億劫ではなく、パリ・バスティーユ・オペラ座で7日から始まったオペラ「カルメン」を見に行った。1875年3月3日パリ・オペラコミック座で初演されて150年、誰もが知る人気オペラだが初演は不評で、ビゼーは落胆のまま3ヶ月後に亡くなる。



ジョルジュ・ビゼー(1838-1875)は1838年パリの音楽一家に生まれ、1875年6月3日パリ近郊ブーヅヴァルで心臓発作のため36歳の若さでこの世を去り、「カルメン」が最後の作品となる。早くから音楽の才能を発揮し、19歳で1857年「ローマ賞」を取得する。「ローマ賞」とは1663年ルイ14世治下コルベールにより設立された王立アカデミー賞(画家と彫刻家が対象)で1年から4年間ローマ留学をして芸術を学ぶ奨学金制度で、20世紀まで続いた登竜門

(30歳以下の年齢制限あり)である。音楽ローマ賞は1803年から始まり、ベルリオーズ、グノー、マスネ、ドビュッシー、ラヴェルらフランス音楽の巨匠たちをローマに送っている。

ビゼーは3年間ローマに滞在し、帰国後成功を取めたのがオペラ「真珠採り」(1863年作曲)で「Je crois entendre encore, caché sous les palmiers, sa voix tendre et sonore comme un chant de ramier (耳に残るは君の歌声)」に始まる韻を踏んだ美しい歌詞とメロディーはロマンスとして単独でも歌われ、ロベルト・アラニーヤやテイノ・ロッシのヒット曲になった。しかし多くの作品は不評に終わり、アルフォンス・ドーデの短編小説「アルルの女」の上演曲として作曲した「アルルの女」(1872年作曲)がようやく成功を取める。

その後直ぐに着手したのが「カルメン」で、フランスの作家プロスペール・メリメ(1803-1870)の短編小説「カルメン」(1845)を基にアンリ・メイヤック(1830-1897)とリュドヴィック・アレヴィ(1834-1908)がリブレット(歌詞)を書き、ビゼーが曲を付けた4幕オペラ(舞台は1820年頃のアンダルシア地方セビリア)。

第一幕:タバコ工場近くの兵舎、第二幕:2ヶ月後、リーリヤス・パステイアの酒場、第三幕:人里離れた山中、第四幕:セビリア闘牛場入り口近く)である。「カルメンは決して譲歩しない、自由に生まれて自由に死んでいく」の歌詞の通り、何ものにも拘束されない自由と情熱の愛を高らかに歌うボヘミア女カルメン。そのカルメンの誘惑に負け、人としての義務も倫理も失う軍人ホセ。ホセを捨てて闘牛士エスカミーリョに心変わりをしたカルメンを嫉妬から刺し殺してしまうホセ。自由奔放すぎて風俗を乱しかねないカルメンに配慮して、原作には登場しないミカエラ(ホセを慕う許嫁でホセの母親の面倒をみる信仰心溢れる従順な女性)を対峙させるが、1875年の観客にはカルメンは下品で受け入れ難い非難的になったのである。

150年経って世界で最も上演回数が多いオペラ「カルメン」の魅力は何だろう。ビゼーの曲によって「愛は飼い慣らす事のできない小鳥」「愛はボヘミアの子」「私を愛さないなら、あなたを愛する」自由で情熱的で運命に逆らわない強い女性像カルメンが生まれたことだろう。上演中の「カルメン」はスペイン人演出家カリクスト・ビエイトで現代を想定した舞台で意図がよく分からないところもあるが、ビゼーの曲の凄さはどんな舞台でも観客一人一人がすでに持っているカルメン像に反しないと思う。



指揮はウクライナ・フリーダム・オーケストラ創始者ケリ=リン・ウイilson。ウクライナ系でカナダ育ち、ジュリアード音楽院を出て活躍中の女性指揮者で素晴らしい演奏だった。2021年からパリ・オペラ座の合唱指揮を務める台北出身の女性ウー・チンリエン。女性指揮者は初めてのことである。2人の優秀な女性が支える「カルメン」だった。

(古賀順子記)

(写真 中央の黒い服の二人が指揮者)